

## I. 導入

おはようございます。先週、使徒 12 章の学びを始めましたが、今日の聖書箇所の内容を思い出すために、12 章のはじめから改めて読みましょう。使徒 12:1-2 「12:1 そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」ヤコブは殺され、殉教者となりました。そして、イエスが彼を天国に迎え入れてくださいました。その後、ヘロデ王も死にますが、それは罪の裁きとしての死です。



使徒 12:3-4 「12:3 そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。12:4 ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。」この箇所には、ヘロデの行動が「ユダヤ人に喜ばれ」たとあります。これはユダヤ人指導者である最高法院を指しています。そこには、70 人のユダヤ人長老がいます。先週、過越しについて話しましたが、ヤコブとペトロはイエスを信じる信仰によって裁きを免れたことがわかりました。ヤコブは死に、ペトロは命拾いしましたが、ふたりともイエスと愛の絆で結ばれていました。



ヘロデ王は、ペトロを監視するために 16 人の兵士を置きました。漁師一人に対してずいぶんたくさん兵士のように思えますが、ローマ帝国ではそれが標準的だったようです。多くの聖書学者たちは、聖書にはっきりと人数は明記されていないが、イエスの墓にも同様に 16 人の兵士が配置されたと考えています。また、任務をしくじった看守は処刑されるというのも、ローマ帝国の通例でした。ペトロが脱出できたのは、彼らの責任ではありませんが、残念ながら、ペトロの監視役だった兵士たちは処刑されることになります。これはあまりに厳しい罰ですが、当時では看守たちが賄賂を受け取るのを防ぐためには必要だと考えられていたのでしょう。多額の賄賂を約束しても、処刑されることがわかっている兵士はそれを受け取らないからです。もちろん、その賄賂の出所が当局からのものであれば、話は別です。

イエスが死からよみがえった時、ユダヤ人指導者たちは嘘をつくことで復活の真理に対抗し、看守たちに賄賂を渡しました。マタイ 28:12 「そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、言った。『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。28:14 もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」28:15 兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。」

これはつじつまの合わない話です。というのも、看守が職務中に居眠りをして、その間に死体が盗まれたのであれば、処刑されることは必至です。このような矛盾があるにもかかわらず、この嘘を信じている人たちが未だにいます。看守たちが処刑されなかったという事実こそ、この話がでっち上げだという証拠です。なぜなら、墓を監視する役目をしくじった看守を処刑させないようにできるのは、政治的権力を持った者だけだからです。

使徒 12:5 「こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。」先週は、ここまでの箇所を見ました。ペトロは投獄され、16 人の兵士に監視されています。教会は、



彼のために祈っています。教会は何を祈っていたでしょうか。ペトロのために祈っていました。彼が牢から救い出されるように祈っていたことは間違いないでしょう。教会はすでにヤコブを亡くしていましたし、人々はペトロを慕っていました。ですから、ペトロが生きて帰ってくるように祈っていたに違いありません。このような背景を覚えつつ、**使徒 12:6-25** をお読みしましょう。

## II. 聖書朗読 使徒言行録 12:6-25, (新共同訳)

12:6 ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の前夜、ペトロは二本の鎖でつながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた。12:7 すると、主の天使がそばに立ち、光が牢の中を照らした。天使はペトロのわき腹をつついて起こし、「急いで起き上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。12:8 天使が、「帯を締め、履物を履きなさい」と言ったので、ペトロはそのとおりにした。また天使は、「上着を着て、ついて来なさい」と言った。

12:9 それで、ペトロは外に出てついて行ったが、天使のしていることが現実のこととは思われなかった。幻を見ているのだと思った。12:10 第一、第二の衛兵所を過ぎ、町に通じる鉄の門の所まで来ると、門がひとりでに開いたので、そこを出て、ある通りを進んで行くと、急に天使は離れ去った。12:11 ペトロは我に返って言った。「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」

12:12 こう分かるとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。12:13 門の戸をたたくと、ロデという女中が取り次ぎに出て来た。12:14 ペトロの声だと分かると、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。12:15 人々は、「あなたは気が変になっているのだ」と言ったが、ロデは、本当だと言い張った。彼らは、「それはペトロを守る天使だろう」と言い出した。12:16 しかし、ペトロは戸をたたき続けた。彼らが開けてみると、そこにペトロがいたので非常に驚いた。12:17 ペトロは手で制して彼らを静かにさせ、主が牢から連れ出してくださった次第を説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい」と言った。そして、そこを出てほかの所へ行った。

12:18 夜が明けると、兵士たちの間で、ペトロはいったいどうなったのだろうか、大騒ぎになった。12:19 ヘロデはペトロを捜しても見つからないので、番兵たちを取り調べたうえで死刑にするように命じ、ユダヤからカイサリアに下って、そこに滞在していた。

12:20 ヘロデ王は、ティルスとシドンの住民にひどく腹を立てていた。そこで、住民たちはそろって王を訪ね、その侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。12:21 定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、12:22 集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

12:23 するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。12:24 神の言葉はますます栄え、広がって行った。12:25 バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って行った。

## III. 教え

この章の終盤は、教会が迫害される中でもイエスの福音がどんど



ん宣べ伝えられて広まっていったことを教えてください。バルナバとサウロはアンティオキアの教会からエルサレムへの献金を募り、ヨハネ・マルコという若者を伴ってアンティオキアの働きへと戻っていきます。使徒 13 章の学びに入るときは、この場面から始まります。

先週見たように、ヘロデ王、厳密にはヘロデ・アグリッパ一世は、自分の罪を厳しく裁かれました。とくに、神のみが受けるにふさわしい称賛を自分のものとして受け入れた罪についてです。しかし、先週もお話しましたが、歴史家ヨセフスは、ヘロデ王が急病に伏して死ぬまで 5 日間あったと記しています。ですから、ヘロデには自分の罪を振り返り、悔い改めるチャンスがあったということです。

ところで、ペトロに何が起こったか、詳しく見ていきましょう。使徒 12:6「ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の前夜、ペトロは二本の鎖でつながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた。」ペトロは鎖でつながれ、休んでいました。兵士はもちろん起きて番をしていました。これは、置かれた状況にかかわらず、私たちがイエスの平安に満たされて安心していられることをあらわしています。クリスチャンとして生きることの問題がなくなるわけではありませんが、イエスを信頼すればするほど、悩みごとがあっても平安や喜びをもつことができるようになります。



使徒 12:7「すると、主の天使がそばに立ち、光が牢の中を照らした。天使はペトロのわき腹をつついて起こし、『急いで起き上がりなさい』と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。」天使が来てペトロのわき腹をつついて起こし、出かける用意をするように言いました。すると鎖が外れて、ふたりは牢から出ました。看守たちは天使によって動けなくされていたのでしょうか。立ったまま眠らされていたのかもしれませんが。ペトロがこの看守たちに福音を語ったことを祈ります。というのも、ペトロを逃してしまったことでヘロデ王は彼らを間もなく処刑するからです。

ペトロはすやすや眠っていたので、まだ完全に目覚めておらず、最初はすべて夢か幻だと思いました。天使によってすべての番兵の目をくぐり、町の門まで連れていかれたところで、やっとペトロはそれが現実に行っていることだと認識しました。使徒 12:12-14「12:12 こう分かったとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。12:13 門の戸をたたくと、ロデという女中が取り次ぎに出て来た。12:14 ペトロの声だと分かったと、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。」

門の前にいるのがペトロだと知って、ロデがどれほど喜んだか目に浮かびます。ペトロのために一生懸命皆で祈っていたのですから。オードリー・ロパタはその時の様子をこんな風に描いています。背景に描かれた鳩は、聖霊の臨在をあらわしています。この場面を読むと、起こったことがそのまま聖書に記されていることがわかっておもしろいと思います。喜ばしい出来事あり、悲しい出来事あり、時にはこっけいな出来事もあります。ここでは、喜ばしいと同時にこっけいな場面が描かれています。ペトロが生きて帰ったことに喜ぶあまり、ロデは門を開けてペトロを中に入れるのをすっかり忘れてしまいます。



Mark マルコ 11:24 で、イエスは弟子たちにこうおっしゃいました。「だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。」聖書全体の内容と教えから、これは神のみこころにかなったことを正しい動機で求めるときにのみ当てはまることがわかります。イエスがこう言われた際、弟子たちはそのことを理解していたでしょう。しかし、そのような条件があるにせよ、これはすばらしい約束です。このような約束があるのだから、弟子たちは神が応えてくださるという確信をもってペトロのために祈っていただろうと思うでしょう。



みことばは、弟子たちが熱心に祈っていたと語ります。では、ペトロが門の前にいると言うロデに弟子たちはどう反応したでしょう。**使徒 12:15-16**「12:15 人々は、『あなたは気が変になっているのだ』と言ったが、ロデは、本当だと言い張った。彼らは、『それはペトロを守る天使だろう』と言い出した。12:16 しかし、ペトロは戸をたたき続けた。彼らが開けてみると、そこにペトロがいたので非常に驚いた。」これを読むと、笑うべきか泣くべきか困惑してしまいます。弟子たちはペトロのために祈っていましたが、神がその祈りに応えてペトロを無事に戻らせてくださると、最初は信じられないといった様子で、事実だとわかると仰天しました。

私たちはどうでしょう。祈りに応えてくださるという期待をもって祈っていますか。それとも、神が祈りに応えてくださったら、信じられないと驚くでしょうか。この問いは、私自身の祈りの姿勢を改めて見直すよう促してくれます。神の偉大な御業と祈りの応えについて聖書で読んでいても、自分の人生で神の奇跡を体験したことがあっても、神が応えてくださるという大きな期待を持たずに祈っていることが多いと私は認めざるを得ません。私は神の愛を信じ、確信していますし、神は最善で正しいことをなしてくださるとわかっていますが、何か具体的な祈りをするとき、神の答えを期待しながら待ち望んではいないことが多いのです。皆さんも同じ経験がありますか。そう感じる人は多いのではないのでしょうか。

問題は、私たちの記憶力にあります。聖書を開き、神が過去にしてくださった素晴らしい業について読みますが、聖書を閉じたとたんに忘れてしまいます。ある必要について一生懸命祈り、神が祈りに応えてくださったら大いに喜びますが、一日寝たら忘れてしまいます。しかし、神が祈りに応えてくださるという信仰と期待をもって祈るには、覚えていなければならないことがあります。それは、聖書の中で、私たちの人生で、またここ OIC の教会や世界中の兄弟姉妹の証の中で、神が祈りに応えてしてくださった偉大な奇跡の数々です。

神がしてくださったことを覚えておくために、古代のイスラエル人たちは記念の石を積むように命じられました。ヨシュア 4:4-7 をお読みしましょう。

ヨシュア 4:4-7 「4:4 ヨシュアはイスラエルの各部族から一人ずつ、かねて決めておいた十二人を呼び寄せて、4:5 言った。「ヨルダン川の真ん中の、あなたたちの神、主の箱の前に行き、イスラエルの人々の部族の数に合わせて、石を一つずつ肩に担いで来い。4:6 それはあなたたちの間でしるしとなるであろう。後日、あなたたちの子供が、これらの石は何を意味するのですかと尋ねるときには、4:7 こう答えなさい。『ヨルダン川の流れは、主の契約の箱の前でせき止められた。箱がヨルダン川を渡るとき、ヨルダン川の流れはせき止められた。これらの石は、永久にイスラエルの人々の記念となる』と。」



古代のイスラエル人のように、私たちにも神がしてくださったことを思い出させてくれるものがが必要です。それは、自分の信仰のためでもあり、また他の人に信仰を継承するためでもあります。もちろん、「記念の石」が文字通り石である必要はありません。ノートやブログ、カードやフェイスブックなど、何でもよいのです。大切なのは、祈りと神の応えを思い出せるようにすることです。それによって、信仰が強められるためです。



あるキリスト教系幼稚園の先生のブログを見つけました。この先生は、毎日子どもたちといっしょに祈ります。子どもたちは祈りの課題を小さなカードに書きます。そして、祈りが応えられると、そのカードをこの容器に入れて保管します。

神は祈りに応えてくださいます。私たちの祈りに対し、神がよく使われる応えが3つありま

す。ひとつめは「はい」。この応えをいただくと、すぐに信仰が強められます。ふたつめは「今はまだ」。この応えの場合、私たちが願ったものを神は与えてくださいますが、今はその時ではないので、私たちは待たなければなりません。この応えによって、私たちは忍耐と信頼を学びます。3つめの応えは「いいえ。あなたにはもっと良いことをわたしが考えているから」。この場合、私たちが願ったものよりも良いものを神が与えてくださいます。しかし、それが何だかすぐにはわからないこともあるでしょう。しかし、神は私たちよりはるかに知恵のあるお方で、すべてをご存じのお方です。ですから、神のみこころがなされるようにと祈ることで、常に祈りに幅を持たせるのは賢明です。



#### IV. 結び

今日の学びでは、神がすぐさま祈りに「はい」と応えて、すばらしい奇跡を起こしてペトロを牢から解放してくださると、弟子たちはたいへん驚いたことを読みました。今、私自身を含め、ここにいる皆さんにお勧めしたいことがあります。それは、神が私たちの祈りに応えてくださった記録を残しておくことです。そうすれば、信仰が強められます。また、神



の素晴らしさと愛を家族や友人、同僚、隣人に説得力をもって伝えられるでしょう。

最後に、テサロニケ第一 5:16-18 をお読みします。「5:16 いつも喜んでいなさい。5:17 絶えず祈りなさい。5:18 どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」祈りましょう。



#### V. 祈り